

デスクワークからテーブルワークへ、仕事の変化と空間機能のマッチング

「オフィスオートメーション」という言葉を最初に聞いたのは、いつだったろうか。筆者の記憶では 25 年以上も前のことだ。いま改めてこの言葉について考えてみると、「オフィスワークの中には、技術によって、人の手を離れて自動化できることがたくさんある」と考えられていたのだろう。長らくオフィスワークの主要な部分を占めてきた「情報処理」と「コミュニケーション」のうち、前者が飛躍的に効率化されるというイメージではなかっただろうか。

■協働作業に合うように空間の配分を見直す

実際のところ、近年の情報技術の進化によって、情報処理型の作業は大幅に効率化されてきている。そのことによって、定型的で分業型の個人作業は減ってきているはずだ。もっとも、この間に処理すべき情報は格段に増えているので、この効率化を実感できにくい人もいるだろうが。

では、オフィスワークのもう一つの要素であるコミュニケーションについてはどうだろう。電子メールやウェブの普及とともに、企業組織内では誰もが直接つながるようになったし、多数に向けての同報発信も可能になった。その結果、多くの組織で、連絡伝達型の会議が減ったはずだ。あるいは、ネット上での議論や意見交換のおかげで、事前説明や調整の時間も減ったかもしれない。

その一方で、常に新しいアイデアが求められたり、複雑な意思決定を迫られたりした結果、チームの力を頼りにする小規模な打合せや会議が増えていそう。最近、「自席にいる時間が減って、会議室で過ごす時間が増えた」とか「会議室の予約がいっぱいで、打合せ場所が足りない」と感じている人は少なくないはずだ。

今後、オフィスワーカーの仕事はさらに専門的で高度な頭脳労働へと移っていき、それに伴ってグループワークも増えていくだろう。もちろん、一人で考える「ソロワーク」も増えるかもしれないが、IT を利用してオフィス以外の場所で働く「テレワーク」によって、分散も可能である。その結果として、オフィス内に残る仕事は、創造的な協働作業が中心になることが考えられる。

創造的な協働作業が中心になれば、オフィス空間の構成も変わっていい。個人用デスクの利用率が下がって、ミーティングスペースや会議室、プロジェクトルームで過ごす時間が長くなるのに合わせて、空間の機能や面積の配分を見直すことは理にかなっている。以下では、そんな改革を一足先に実行したヨーロッパの事例をみてみよう。

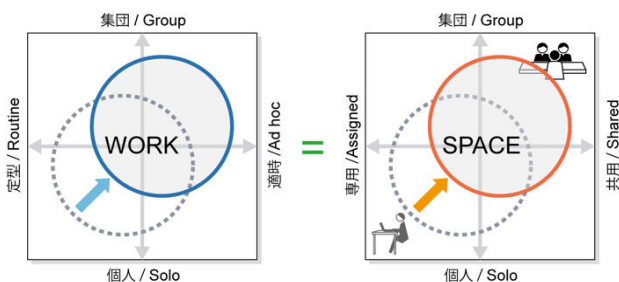


図1: 行動が変われば、必要な空間も変わる

■最小限の個人席に豊富なコミュニケーション空間、BBCのメディア・センター

BBC(英国放送協会)が不動産分野で進めている改革プロジェクト「2020 Property Vision」の下でつくられた新本社オフィスの一つ「メディア・センター」。ここで 1200 人が働いている。移転前は個室中心のオフィスだったが、移転後は明るいオープンオフィスとなった。人々の出会いや交流を誘って、コミュニケーションを支える空間になっている。

6 階建てで、延べ床面積が 3 万 9000 m²のメディア・センターには、明るい光を採り入れる3つのアトリウムがある。真上から見た形はちょうど漢字の「目」のようだ。上下階が見渡せる吹き抜けの周りには、やや密度の高いデスクスペースと、多様なタイプの広めなパブリックスペースが配置されている。

正確な数値は分からないが、それらの面積比はほぼ同じくらいに見える。デスクのレイアウトはいわゆる「対向島型」と呼べるもので、ひとり分のデスクはさほど大きくない。そのすぐそばには、色々なタイプのオープンラウンジや会議室が見える。インテリアには、白い壁とダークグレーの床をベースに、いすやデスクトップパネルに用いたカラフルな素材と木質系の建具などをバランス良く配し、会議室を仕切るガラスにダイナミックで遊び心のあるグラフィックが描かれているなど、ナチュラルで品良く、それでいて活気のある仕上がりとなっている。人々がどこで何をしても、常にお互いにその気配を感じることでできる「ほどよい集まり方」を支えてくれそうな雰囲気空間である。



写真1: アトリウム越しに見たデスクスペース。こうした小規模な対向島型のレイアウトは、イギリスやドイツのオフィスでよく見られる。



写真2: 個人席の様子。さほど広くはないが、在席率が低ければ過密感はない。



写真3: デスクスペースから見える会議室。どちらのエリアにおいても、全体の気配が分かる。



写真7-9: 通路沿いには複数のオープンラウンジが用意されている。ちょっとした打合せのほか、気分を変えて集中作業に重宝しそうだ。



写真4-6: 用途に応じてさまざまなサイズが選べる会議室。間仕切りはすべてガラス製で、グラフィック処理やブラインドで透け具合が調整されている。

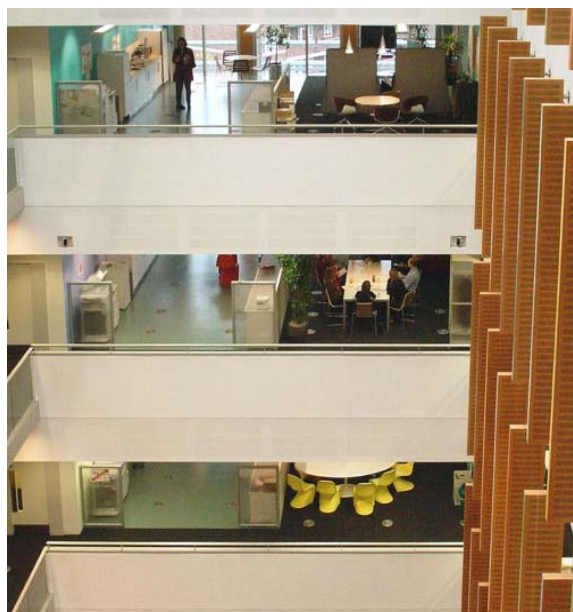
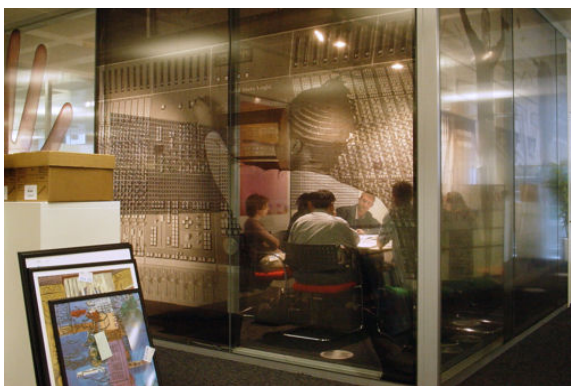


写真10: 各階ごとにミーティングスペースのレイアウトが異なっているのは、オフィス家具の選択に従業員が参画し、部署それぞれのニーズを反映した結果だ。

■「クラブハウス」を持つオランダInterpolisの本社オフィス

1990年代半ばから、インターネットが急速に普及し、モバイルワークやテレワークが拡大し始めたころ、未来のオフィス像についても多くの予測がなされた。例えば、「すべてはバーチャルになり、人々はオフィスに行く必要がなくなる」「やはりリアルな交流は不可欠で、そのための交流型空間が中心になる」など。意見はたくさんあったが、どちらにしてもその根拠となったのは、「コミュニケーション活動をどうとらえるか」にあったように思う。以下に紹介するオランダの保険会社Interpolisの本社オフィスは、そんな問いに対する答えの一つになりそうだ。

同社の3,000人が働く22階建てオフィスタワーが完成したのは1995年。以来、進歩的な組織への変ぼうを目指しながら、フレキシブルワーク・プログラムやテレワーク制度の導入を経て、今ではCEO(最高経営責任者)を含むすべてのワーカーが固定席を持たない自由な働き方を実践しているという。そうして、働く場所と時間の自由度が最大限に高められた2003年に、人々が「集う」オフィスとして再設計された。

中でもユニークなのが、このオフィスが立地する地域と同名の「チボリ」と名づけられた低層部の大空間。雰囲気異なる7つの「クラブハウス」から成り、「働く」「会う」「食べる」「くつろぐ」を目的とする空間が混在している。「自律分散的に都市で働く人々がオフィスに戻ったとき、そこは同僚たちと自然に出会い交流できる拠点であるべき」との考え方からだ。もちろん自由に仕事もできるし、そのための道具やインフラ、仕組み、サービスが整備されている。どうやら、このオフィスの中で席が固定されているのは、受付とサービスデスクのスタッフだけのようだ。



写真11:ユニークな形のミーティングチェア。他者の視線を適度に遮り、意外と使いやすい。



写真12:「ストーンハウス」と呼ぶ会議用の洞窟。会議室としての機能は満たしている。



写真13:長いワークテーブルは、図書館の自習室のような雰囲気。



写真14:カフェテリアも重要な作業空間であり、交流空間でもある。



写真15:高機能な椅子なら長時間の会議でも疲れにくい。



写真16:堂々とリラックスできる雰囲気がある。



写真17: もちろん、普通の会議室もある。



写真18:「ニューズスクウェア」と呼ぶライブラリーエリアのワークテーブル。



写真19: 共用空間を個人のニーズに合わせるためには、人間工学的配慮が重要だ。このテーブルは天板の下に据え付けられたボタン操作で電動昇降できる。机上にはノートパソコン機能を補うドッキングステーションが置かれている。



写真20: サービスデスクの窓口カウンター。

■オフィスの機能を再考するとき

近年、日本のオフィス環境も良くなってきたと思う。少なくとも、新設されるオフィスには伝統的なグレーのデスクは見当たらない。デスクの前には使用者の地位にかかわらず高機能な椅子が置かれるケースも増えてきたようだ。

しかし、人々がデスクの前で過ごす時間が短くなって、実際は粗末な会議室の椅子に長時間座っているとしたら、皮肉なことではないか。オフィス空間が機能一辺倒で味気のない場所のように言われたのは過去の話。むしろ、求められる仕事と行為の変化に対応して、きちんと機能を充実させれば、オフィスはもっと豊かで居心地の良い空間になるはずだ。